

グループ・カウンセリング的手法を取り入れた学級経営

—学級集団の意識を高める試み—

吉 川 一 男*

この研究は、中学校普通学級において、担任が毎月一回継続的にグループ・カウンセリング（人間関係訓練集団）を実施し、学級集団の変容過程を考察したものである。過程尺度には、岡堂哲雄氏の4段階を参考とした。その結果、直線的、段階的に証明することは不可能であったが、自己理解を深める中で他人受容の態度が変われ、学級集団を中心とした「動き」は形成されたものと思われる。

I はじめに

3年生52名を2クラスで編制する小規模校である。小学校担任からの申し送りでは、男子は解放的で、成績も全般に優秀であるが、女子31名の中には3人のボスを中心とする3つのグループができており、それが常に対立して学級経営の面では大変苦勞させられたということである。そこで、1年の学級編制では、それを受けて、当面の措置として編制のいかんによっては、グループの分散や集団のまとまりが高まるのではないかと予想をたて、慎重に取り組んだのである。しかしながら、学級編制では一応その成果は認められたが、H子を中心とする5人グループは、運動部（排球部）の中心メンバーとして勢力を発揮し、2年進級の際には、その分散をねらい再編制を図ったが、対抗グループが表面化し学級経営に新たな問題をなげかけた。グループの知能偏差値は平均57.5と高く、運動能力にもすぐれ、概して外向的な性格ではあるが、なかでもリーダー格のH子は、向性検査によると感情変易性が72で、神経質36とややヒステリックな性格であるため、他の女子に与える影響が大きかった。したがって、学級集団としての盛り上がりがなく、表面的には平穏でありながら、内面にはよそよそしい人間関係さえ感じられた。そこで、集団内の相互理解を深めると同時に、自己理解を深める中で他人受容の態度を身につけることを目指し、グループ・カウンセリングを実施した。

II 研究の目的

グループ・カウンセリングを通して、学級集団の変容を図り、安定した学級集団の形成を目指したものである。

III 研究の方法

1 対 象

* 白根市立臼井中学校

中学校3年生普通学級 1学級 (男子10名, 女子16名 計26名) 全員

2 学級の実態

2年進級の際, 学級編制では多面的に検討を加えたのであるが, 夏休みを終え2学期の中頃から, 学級集団としていくつかの問題点が見られた。とくに, 下記のような問題点が, 観察や学級意識調査から見られる。

- 芯の強い女子5人グループを中心に, 常に抗争が学習時間, 課外活動において見られた。
- 特定個人を中傷する言動が目立つ。
- 男女の対立が目立ち, 男女合同の仕事は何一つとしてとまらない。
- 学級集団に所属する満足感がない。
- 学級集団としての凝集性に乏しく, 担任依存が強い。

8 実施の概要

2年生の10月から, 3年生の7月まで通算9回, 毎月第3週目に適当な日の放課後, 45分間下記のような場面構成で実施してきた。

- 他人の意見を中傷しないこと。
- 話される事柄については, 他に漏らさない。
- 時間内に話し合われた事は, 他に発展しないこと。
- 時間を厳守すること。

当然のことながら, 性格的に自分の意見を発表できないメンバーについては, 無記名で表現することのできる落書帳を設け, 可能な限り一人一人の意志が全員に伝わるようにし, その中でメンバー間の相互作用が図られるよう配慮した。

IV 研究経過とその考察

1 グループ・カウンセリングにおける集団変容の過程

学級集団の変容の過程を評価するには, 多面的に観察, 測定されなければならないが, ここでは, 4段階に分け, その過程を分析, 考察した。

- 第1段階 メンバーが, トレーナに対して依存欲求の現象が見られる。
- 第2段階 構成員が分極化し, 活動的で防衛的でない集団と, 受動的で防衛的な集団とに分かれ, 分裂と対立が特徴的である。
- 第3段階 集団基準としての開放性が現われ, 許容的態度, 感情的支援, 凝集性などの学習が生起し易い雰囲気になる。
- 第4段階 一応最終段階となり, メンバーに支援と相互受容を与えるような, 有効な組織化が進み成員がいかに内面化し, 一般化するかを学ぶのである。

以上の段階を経て、最終段階に達した時の一つの側面は、集団の中で感じたこと、思ったことをさらに表現でき、しかも、それが率直に受けとられるような関係が、メンバー間に確立されるのである。つまり、ここでねらうことは、人間関係における感受性を高めることをねらいとしているのであって、単に話題の結論やテーマに固執することではない。

第1段階

(L:リーダー M:メンバー)

第1回

M₁「先生、何かテーマを設けて下さい。」
 L₁「M₁さんは、テーマを設けたいのですね。」
 M₁「そうでないと、話し合いはできません。」
 L₂「テーマを設けないと、話し合いができないと言うんですね。」
 M₁「はい」
 L₃「この時間は『自由に話し合える時間』としてのです。だから、自由に話して下さい。」
 M₂「学年集会で先生は、人間関係は大変むずかしいと言われましたが、具体的には……」
 L₄「大変むずかしいと思っています。」
 M₂「先生は、えこひいきをしていないと言いましたが、えこひいきをしていると思いますので、答えて下さい。」

L₅「えこひいきをしていると言うことに、答えてもらいたいのですね。」

一部女子の間で、えこひいきをしているのにずるいとの声、男子は依然そうそうしい

M₃「私達は、アイドルについて大変さわいでおります。男子はこれについてどう思いますか」

—沈黙3分—

L₆「M₃君は、長い間沈黙を保っていますが、今のことについてどうですか。」

M₄「うーん、あんなのばかばかしいと思う。」

M₃「ばかばかしいと言うことは、アイドルでさわいでいることなのか、または考えていること自身なのか。」

(女子は、そうだそうだの声)

M₄「うん、全部だ。」

初めての体験なので、殆んどの生徒はこの場面に対するためらいが感じられる。開始15分間の雰囲気は、場面構成『自由』に対する解釈が問題となり拒否的言動も感じられたが、メンバーのリードがあってM₁の発言がでてきた。M₁の感情をそのまま反映してやると、スムーズに話が続いた。M₃の発言は、メンバーの反応を観察し、受け入れられる対人行動を確かめる現象であり、グループ・カウンセリングの初期と見られる。

第2段階

第3回

L₁「M₁さん、さっきからその辺でささやき合っていますが、何か話はありませんか。」
 M₁「男子が、特定の人をいじめたりしているので。」
 (男子は、意外と言う雰囲気否定する)
 L₂「S君、何か。」
 M₂「特定の人をいじめていません。」
 (女子は、ちがうと批判)
 L₃「男子では、特定の人をいじめている覚えはないと考えるけど、女子からすればいじているのではないかと見えるのですね。」
 M₃「いじていると言うより、特定の人を馬鹿にしているのです。」
 M₄「たとえば……」
 M₃「その人だけを中心にして、他の者はぐるになってさ。」
 M₅「俺達がやっているなら、女はどうだね。ゲル」

—ブつくってな。」

L₄「女子は、ゲル—ブつくっている。」

M₅「ゲル—ブつくって、いじめているん。」

(ゲル—ブつくっても、いじめていないと反発)

L₅「Nさん、このことについてどうだね。」

M₆「さっき、特定の人をばかにしていないと男子は言うけど、私達の目から見れば、そういう風に見えるし、それにある程度の冗談ならその人だって冗談として受けとれるけど、余り度がすぎると、こんどは私達の方から見て自分の場合考えると、それは私達が思うことだけど、自分のことにたとえると、すごくいやな思いもするし余り度がすぎると、その人の心に傷がつくみたいで、すごくいやな思いをするのではないか。」

L₆「度のすぎる言葉を言われると、その人の立場に立って考えると、可哀相であるという感じ。」

M₆「はい。」

以下省略

雰囲気として、ようやく受容的になり、話してみようという動きが出てきたことが感じられる。M₁の行動から、その感情を反映してみると、2分40秒からスムーズに展開した。M₁からM₅までは、男子対女子に分極化し、それぞれ集団防衛が相互批判の中で、その維持機能が図られている。従って、外からの攻撃や挑戦がはっきりした形に表われ、集団の危機が明白になると、集団のまとまりは一層しっかりとし、統合力は強化され、むしろ内部対立は相対的に減少している傾向が分かる。その中で、L₅の指示的リードによつての発言は、単に男子への攻撃ではなく、日常感じている自分の感情を率直に述べており女子内部への批判が感じられる。これは集団離脱現象であり、更に分極化が進行する。

第3段階

第4回

L₁「それでは、これから40分間、ここで今考えていること、意見なんでも話して下さい。」

M₁(B)「月曜朝会の体育館清掃に女子の出方が大変遅いのです。」

L₂「あゝ、女子の出てくるのが遅いわけですね。」
M₁(B)「いや、全然出てこないのがあるんだ。」

L₃「寒くて、冷たくて、いやなんだろうね。M₂さんは、何か話しているようですが、意見ありませんか。」

M₂(G)「私も含めて、女子みんな悪いと思います。」

L₄「自分も悪いけど、女子みんな悪いと言うことですね。」

M₃(G)「先生は何か変な風に言うけど、女子みんな悪いんです。」

L₅「あゝ、女子みんな悪いんだね。」一沈黙2分
「意識してさぼるものと、無意識で忘れている者がいると、何か無意識の者までがそこに含まれると可哀相な気もあったのですが。」

M₄(G)「いや、それは朝きて、ストーブの囲りで遊んでいても、誰も声をかけないと出にくいので、つい出ないのだらうと思います。」

L₆「あゝ、出にくいんですね。」

M₅(B)「この次の清掃まで、待ってみたらどうか。」
(男子、それでいいやの声)

一以下略一

第6回

場面は、教室へ入ると接着剤の悪臭でいっぱい

優秀児の机上には木工部品がばらつき、発生源はわかった。そこで、強くしかり退室を命じた。

L₁「それでは、はじめたいと思います。」

M₁「先生は、Y君の言葉で頭にきて怒ったろう。」

L₂「あゝ、M₁君はY君の言葉で頭にきて、感情的に怒ったと言うのだね。」

M₁「そうだろう。」

L₃「S君は、そう思うわけだね。」

M₂「先生は、1学期の始めに、この1年間かかって私達の性格を変えと言われたのだから、先生の方針だから、それでよいと思います。」

L₄「先生の方針だから、間違いないんだ、それでいいんだと言うことですね。」

M₃「Y君の日常生活の態度からして、今日のことは、Y君のためには良かったのだと思います。」

L₅「あゝ、本人の性格が変えられるんだから、よかったのだと考えるのですね。」

M₃「はい、そうです。」

L₆「他に、どうですか。」

M₄「みんなの前で怒らなくても、別のところでやった方がよいと思います。みんなの前で、はじをかゝせなくても……」

L₇「Y君を可哀相だなあ、とおもっているのですね。」

(そうなんだと言う感じであるが、余り自信なさそうな態度になる。)

回を重ねるにつれて日常いだしている問題点がスムーズに表現されるようになってきた。これらは集団基準としての解放性が現われ、相互受容の動きが見られる時期で凝集性のきざしが感じられる。また、リーダーのリードは主として、メンバーの感情表明を動機づけようとしているため、メンバー自身が気づけなかった、自己の感情にふれずにいられないような場面も多く経験するが、M₃のように他のメンバーに防衛機制がしかれる、あるいは、他のメンバーによって、自分の姿を指摘されるという体験を通して、いやでも自己と対面させられる機会が与えられることなど、それらは、いずれも、個人カウンセリングでは得られない、グループ・カウンセリングの特色と言える。

第4段階

第8回

—前 略—

L₁ 「今は、Hさん1人で一生懸命話しているんだが、他の生徒は、Hさんの言っていることに関係ないみたいな気持ちでいるのではないのかな。Hさん、困っているんじゃないですか。」

M₁^(G) 「みんなだって、そういう意見があるんだし、意見出した方がいいよ。」

—中 略—

M₂^(G) 「今は、Y君の言ったようにやる気があるか、ないかを決めた方がよいと思います。」

(賛成と言う空気の中で、調査が始まった。)

M₃^(G) 「手を上げたりすると、ゆきたくないんだけど、皆さんに悪いから手を上げると言う考えもあると思うので、紙に書いて調べた方がよいと思います。」

M₄^(B) 「そんなことすると時間がかかるので、目をしてやった方がよいと思います。」

M₅^(B) 「そんなことすると、真面目な者はよいが、不真面目な者は横目でみるので、その方法は余り良いとは思いません。」

L₂ 「あゝ、信用できない者がいると言うことですね。だから……」

M₆^(B) 「だから、紙にでも書いたら……」
(どんな方法が良いか騒然とする)

—2分50秒—

M₇^(G) 「顔を伏せて、手を上げたら良いと思います。」
M₈^(B) 「はい、それでは、顔を伏せて下さい。やる

気のある者は手を上げて下さい。……やる気のない者は手を上げて下さい。」

M₉^(B) 「数は、どうか。」

M₁₀^(B) 「数は、17対6でやる気が多い。」

(6名の反対をどうするか、その比重は大きいと感じられた。)

L₃ 「それでは、約束の時間ですので終わります。」

M₂(s)からM₁₀(s)までは、どのように決定すべきか、メンバー間にかなり相互関係が深まってきた。それが、個人個人の問題として深められる中で、意識化が図られているようである。批判的、または集団防衛的要素の強い前段階までの発言は、自然発生的に一定の集団基準に基づく凝集力が感じられるものになってきた。特に、学級行事としてのキャンプを、どのようにして実現させるべきか、全員が共通の問題意識をもって、取りくもうとする姿に変容した。この意識化を、学級集団の生産性と考え、さらにこれを組織的に発展させたい。

以上、グループ・カウンセリングによる集団変容の過程を考察するにあたって、便宜的に4段階に分けたが、段階的に証明することは殆んど不可能であった。しかし、自己中心的で担任依存の強い集団が、相互関係を重んじながらメンバーを大切にする学級集団へと成長したことは明らかである。

2 集団意識調査の比較と考察

(表1)は、文教書院出版学年経営による学級集団意識調査であり、8回実施し、比較したものである。

(表1) 学級の満足感(数字はパーセント)

調 査 項 目	男 子			女 子		
	1月	6月	9月	1月	6月	9月
問1 あなたは、このクラスにすることが、楽しいですか。						
イ、はい	80	80	90	40	80	80
ロ、いいえ	0	0	0	12	6	0
ハ、どちらでもない	20	20	10	48	14	20
問2 クラスの生活は、あなたのためになることが多いですか。						
イ、はい	80	70	90	58	60	67
ロ、いいえ	10	0	0	12	6	6
ハ、どちらでもない	10	30	10	30	34	27
問3 このクラスは、学校ではよいクラスだと思いますか。						
イ、はい	60	70	90	53	87	94
ロ、いいえ	10	10	0	6	0	0
ハ、どちらでもない	30	20	10	41	13	6

(表1)に見られるように、女子は、男子に比較して、満足感、所属感の変容傾向は回が進むにつれ、著しいものが見られる。問1では、当初12%であった女子の否定が、1学期の中頃から、他人受容の態度に変わり、グループは何組もあったが、その抗争は殆んど見られなくなっていた。

(表2) 学級の親密度

調 査 項 目	男 子			女 子		
	1月	6月	9月	1月	6月	9月
問1 このクラスの中にいるのは、不安ではありませんか。						
イ、はい	80	70	90	66	86	86
ロ、いいえ	0	0	0	12	0	0
ハ、どちらでもない	20	30	10	22	14	14
問2 クラスの中で、心を開いて相談できる友達はいますか。						
イ、はい	20	50	50	33	60	60
ロ、いいえ	40	40	30	40	34	40
ハ、どちらでもない	40	10	20	27	6	0
問3 自分がクラスののけ者、じゃま者とだれかに思われていると感じることはありませんか。						
イ、感じない	70	60	70	54	46	60
ロ、時々	30	40	30	26	48	30
ハ、感じる	0	0	0	20	6	0

生徒同士の親密度は、相互理解が深まる中で、着実に好ましい傾向を示してきている。実際の動向を見ても、6月頃からは、積極的なグループが、消極的なグループへ進んで働きかけている場面が多く見られるようになった。一般的に閉鎖的な傾向を示す女子の人間関係においては、問2の数字が示しているように、1月で27%示した拒否の数字が、9月では、殆んど同一化の傾向にあることは、成員間の親密度が深まり、学級集団としての安定感が個々に確立されることを示している。

(表3) 学級集団への協力度

調 査 項 目	男 子			女 子		
	1月	6月	9月	1月	6月	9月
問1 このクラスのためなら、ちょっとしたことはがまんできますか。						
イ、はい	50	40	70	46	73	73
ロ、いいえ	10	10	10	20	20	6
ハ、どちらでもない	40	50	20	34	7	21
問2 このクラスの話し合いで決ったことは、実行できますか。						
イ、はい	50	60	80	66	88	74
ロ、いいえ	10	0	0	6	6	0
ハ、どちらでもない	40	40	20	28	6	26
問3 クラスのためになる仕事は、やはり合いがありますか。						
イ、はい	70	80	90	66	73	88
ロ、いいえ	10	10	0	6	6	0
ハ、どちらでもない	20	10	10	28	21	12

表3では、クラス意識が高まりつつあることを示している。当初は、自己中心的な考えが強かったように思われたが、次第に学級集団の一員であるという自覚が個々の間に高まりつつある。学級を単位とする校内行事では、特定の生徒または、係のみに任せ放しという態度は見られなくなり、むしろ係からの協力要請には積極的な態度で協力するようになった。問3の数字は、学級への貢献度の好ましい傾向を示している。

V おわりに

初めの頃は、理論的な体系もなく、まとまりのない学級には、何か不平、不満があるのではないかと。また担任自身の未熟さからなのか、その原因を追求すべく試行錯誤する中で出発したのであった。しかし、回を重ねるたびに担任に対しての反発が強くなり、むしろ学級集団としてのまとまりがなくなってゆく感じがした。そんな中で、集団心理学を追求することによりその方向が定まったのである。

担任依存の強かった集団が、自主、自律性のある学級集団へ成長し、何事にも非協力的な態度しか、示さなかった女生徒が、校内水泳大会にはリレーメンバーとして、生き生きと参加している姿を見て、黙して語らず、ただメンバーの感情の動きをとらえていた時間は、決して無駄ではなかったことをしみじみ感じている。

参考文献

岡 峯 哲 雄 著
M・O - ルセン 著

集団力学入門
グループ・カウンセリング